

ゆうこみゆき。



なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



今月のテーマ チャランケ(談判)



イラスト/安田千夏

チャランケ(談判)って知ってる?今でも時々「チャランケつけられた」って、まるで「言いがかりをつけられた」みたいなニヤンスで使う人がいるけど、大間違い。そもそもは、チャリ口、ランケ口を下さす、つまり徹底的に言葉と知恵を尽くして議論するという意味です。これがかつてのアイヌの人たちの物ごとの解決法だったの。当事者自身で解決できなかったり、村と村の間にもめぐりが起こったりしたら、村おさ同土が公開の場で延々とチャランケしたんですって。で、相手を言い負かした方が勝ち。劣勢になって怒りに任せて拳を振り上げたりしたら、即、負けたことになるの。なんて平和的(な)と思うでしょ。

だから、村おさになるにはパウエトク(雄弁)が第一の条件。じゃ、ここで前号からの宿題「なぜ村おさはカツコよくないといけないのか」——出て行った瞬間に「う、負けたかも……」って相手を圧倒するような堂々たる男っぷりだと二層有利になるからなんですって。

というわけでかつてのアイヌ社会では、男の子たちは小さい頃から、今でいうディベートの訓練をし、ひたすら論理的で力強い言葉を操れるように努力を重ねたとのこと。しゃべれない男は男じゃない!「男は黙って〇〇ビール」の世界とは大違いだね。



昨年(の)十二月に放送された「今よみがえるアイヌの言葉」百枚のレコードに込められた思い」という番組で、白老で収録されたチャランケが紹介されたの。主(ま)より先に猟場(やま)に入(い)って獲物(とら)を捕(と)り、それを売(う)って酒(さけ)などを買(か)ったことに怒(いら)り、「……それがアイヌとしての振舞(ふるま)いなのか、それが先祖(いそ)からの振舞(ふるま)いなのか……」とその是非(是非)を問(と)い、相手(あ)いは「……あなたが所有(しゆりやう)する熊(くま)穴(あな)から熊(くま)が出(で)てきたところ(ところ)に出(で)くわした(わ)ので仕留(しりぞ)め、これを売(う)り、それで種々(しんしん)の品(しな)を買(か)った……、神(かみ)に罰(ば)せられる行(な)いをした(し)たので……」と罪(とが)を認め(とら)め謝罪(あやま)りをする(し)るという(いう)もの。昭和(しやうわ)二十一年(に)頃の録音(ろくおん)なので、実際(じつざい)のチャランケ(な)ではなく、典型的(ていけんてき)な事例(じよばい)を継承(けいせう)した(し)たもの(もの)だと思(おも)いますが、初め(はじ)めて耳(みみ)にしたチャランケ(な)は言葉(ことば)を節(せう)にのせてゆつくりと謳(うた)っている(てい)るよう(よう)に聴(き)こえました。

『アイヌの足跡』(大正十四年刊)でチャランケは「弁論の決闘」、「……互いに自己の主張を高唱(こうせう)し(普通(ふつう)の会話(かいわ)よりも大声(おほこゑ)で、しかも話(わ)に重み(おも)をつけるため(ため)か特別(とくべつ)の抑揚(おさげ)をつけ、火箸(ひし)を持って灼縁(さか)を叩(たた)いて勢(いき)をつける)、互(た)いに譲(や)らない。一方(いっぽう)が謝罪(あやま)しない限り(かぎり)昼夜(じやうや)通(とお)して数日(すうじつ)間(ま)論戦(ろんせん)を続(つ)ける……」ってある(あ)るよう(よう)に、私も(わたし)チャランケ(な)って激(げき)しくてタフ(たふ)なもの(もの)と勝手(かち)に想像(さうぞう)して(して)た(た)けど、状況(じやうきょう)に應(こた)じたい(たい)るんな(な)ケース(けい)がある(あ)るんだ(んだ)よね(よね)、きつ(きつ)と。

